



愛白花



のと。

序

†††††

「ああ、今日も暇ねえ。」

ふわあ、と欠伸交じりに眩きながら、少女は窓から下を覗いていた。

否、それは窓ではなく窓がはめられる予定だった、ただの『穴』だ。

よくよく見れば打ちっぱなしのおしゃれなマンションというには少々むき出しのコンクリートがざらついており、汚れも目立っている。

気づかなかったのは暗さの所為か。ここには明かりをつける電灯もつけられておらず、ただ、少女の後ろにこの場所には不釣り合いの一目で高価だとわかる赤い布地のソファと机が一揃えあるだけだった。

そこは、工事が中止された廃ビル。その最上階だった。

自殺者が多発したことにより、誰も入れないように鍵をかけられたはずのその場所に、その人はいた。

年は、十七ぐらいだろうか。このビルから少しはなれた所にある公立高校の冬服を身にまとい、髪は少し肩よりも下ぐらい。結ぶことなく風に遊ばせている。

容姿もあまり特徴的でもなく、だれからも好かれる顔でもなければ人から嫌われるわけでもない、街ですれ違ってもすぐに忘れるだろう顔。それに今はけだるげな表情を浮かべている。

黒い髪と、黒い瞳。ただ、その瞳にはよくみると少しだけ、紫の光が見えた。その光が見えると彼女の周囲に埋もれてしまいそうな雰囲気が一瞬だけ恐ろしそうな、冷たいものに見えてしまう。

その瞳を隠すようにも見える、緑色のふちの、あまり流行ではない形の眼鏡。

そんな、どこことって目立つわけでもない少女は、ただそこで欠伸をこらえていた。

「明日からはそんなことも言えなくなりますよ」

彼女以外いないはずのその部屋に低い男の声が響く。

その声に少し疲れたような顔をしながら少女は振り向く。

暗い部屋の中で顔はわからないが青年であろう男がソファに腰かけていた。

その人物を見て少女は軽く肩をすくめる。わかっているといたげに。

「用意はできてるわ、接触もね。貴方は心配するなど上に伝えてくれればいいの」

「その報告が嘘でないことを祈っていますよ」

あら、ひどい言われようねと唇をとがらせてすねた表情を作るが相手は何の反応もしない。

やっぱりそういう風に出るのねと笑い、わかってるとつぶやいた。
それは突然吹いたビル風に奪われ、男には聞こえなかったようだ。

「おっはよ、未咲」

「んー、おはよう雪」

フワ、と欠伸をこらえながらあいさつを返してきた未咲に、雪はくすくすと笑った。

「雪、未咲、おはよう！」

「おはよう、春香」

途中であったクラスメートにも笑顔で返ししながら、雪は未咲の隣に並んだ。

「いつも眠そうだね。夜更かしでもしてるの？」

「早寝遅起きなだけ。寝る子は育つの。そう言えば雪、よーへーはどうしたの」

欠伸をこらえながら尋ねてくる未咲に、雪は苦笑した。

「陽平なら、いつも通り朝練だよ」

その声に含まれた少しの悲しみと、痛みをこらえる表情に気づいた様子もなく、未咲はそう、と頷いた。気づかれなかったことに、雪は安堵した。

未咲は眠そうに欠伸をする。それを見て雪は微笑んだ。

——気づかれてはいけない。

——この想いは、誰にも気づかれてはいけない。

——誰にも。誰にも。

「雪、どこか痛くない？」

「え？」

突然の問いかけに、雪ははっとして未咲を見た。

未咲は前を向いていて、逆光で表情が見えない。

しかし、その声には心配の色も、逆にあざけりの色も見えなかった。

ただ、淡々とした、冷たくも暖かい声。

「……痛く、ないよ」

「そう。それならいいけどね。……我慢しても馬鹿を見るだけだ」

最後の一言は、あまりにも小さくて雪には届かなかった。

首をかしげて未咲をみるが、未咲はただ、眠そうに欠伸をしているだけだった。

「あ、桜木先輩！これ、よかったら使ってください！」

「ずるい！あたしの方を使ってください！」

「あたし、特性ドリンクつくって来ました！」

昼休み、運動場に出ると、その人の周りにはもう人だかりができていた。

「よーへー大人気ー」

「うん……」

うわーと笑う未咲の隣で、雪は苦笑した。

そこにいるのは、雪の幼馴染で、未咲の友人でもある少年。

女子からの人気は絶大で、それでも男子からも人気のある少年だった。

桜木陽平

無愛想な少年だが、それがクールだといわれている。

陽平は、周りに群がる女子に困ったような視線を向けながら、誰かを捜すように辺りを見回した。そして、ほっとしたようにその名前を呟く。

「……雪」

雪は、陽平に微笑んで手を振った。

「オイオイオイオイ、あたしの事は無視ですかい」

ニヤニヤ笑う未咲に、雪は苦笑した。

陽平は女子達の群れを書きわけ、雪達の方へ歩いて来た。

「おつかれ、大人気のよーへー君」

「お疲れ、陽平」

右手をシュタツと楽しげに上げる未咲に苦笑を漏らしながらも、雪は陽平にタオルを差し出した。それを陽平はいつも通り受け取る。

「ありがとう」

一言呟いて、陽平は雪の頭に手を置いた。

とたんに、後ろの女子達から悲鳴のような叫びが聞こえだす。

「いやあ、よくもまあ、あんな声が出るね」

呆れたように後ろを振り返る未咲に、雪は苦笑しか返せなかった。

陽平が他の女子から何も受け取らないのも、雪からタオルをもらった後に雪の頭に手を置くのも、それをみて女子が叫ぶのも、その叫びに呆れたように未咲が感想を言うのも、いつも通りの光景だった。

そう、いつも通り。

この関係を、この光景を壊す一言を、雪は知っている。

壊したくないからこそ言えないその言葉を、自分がいいたいと思ってしまうことも。

「……痛く、ないよ」

隣にいる陽平に、未咲に、自分以外の誰かに聞こえないように、小さく呟いた。

——気づかれてはいけない。心配をかけてはいけない。

——皆を困らせてはいけない。悲しませてはならない。

——だって、大切だから——

5時間目の数学。雪は頭痛とめまいを感じていた。

まるで、中と外から叩かれているような、揺さぶられるような激しい痛みに、自然と顔がこわばる。目の前の景色も、少しずつゆがんでいるように見えた。

「雪、大丈夫？」

顔色の悪い雪に心配そうに未咲は声をかけた。

「うん、なんでもないよ」

一生懸命笑顔を作ろうとしているのに、未咲の顔はますます心配そうになるだけだった。

眉間にしわを寄せて、未咲は手を上げた。

「先生、雪が体調が悪いみたいなので保健室に連れて行きます」

大丈夫、と言おうとしたのに、声が出なかった。

数学の先生も、雪の顔色の悪さに眉をひそめ、頷いた。

「立てる？」

「う、ん……」

足に力をいれ、立ち上がり、廊下まで出た。未咲は心配そうに後ろからついてきていた。

肩を貸すと言う未咲に首を横に振り、そのまま歩き出す。

「っ、雪！」

突然、未咲の叫び声が聞こえた。

首を傾げようとした雪は、それができないことに気づいた。

床が、迫ってくる。からだは、思うように動かない。

「危ない、雪！」

目の前に、未咲の、細めの指が見えたところで、雪は意識を失った。

最後に、雪はこのまま意識が戻らなければと、そう思っていた。

そうすれば、自分は道を誤らないのに、と。

「……雪は、どうした」

放課後、いつものように雪達の教室にやってきた陽平は、未咲が一人でやってきたのに眉をひそめた。少し、声が怒っているように聞こえる。

「5時間目に倒れて、保健室に連れて行かれたよ。お兄さんが来て連れて帰った」

悲しそうに首を傾げて告げる未咲の言葉に、陽平は驚いた。

「雪が、倒れた……？」

「嘘じゃないからね。あたしが嘘をつく理由はないでしょ」

その驚きを、疑いだと感じたのか、未咲は不機嫌そうに、吐き捨てるように言った。

「と言うわけだから。それじゃあ」

そう言って横をすり抜けようとした未咲は、ふと、陽平を見上げた。

「そう言えば、あんた雪の家知ってたよね。あたし知らないから、連れて行ってくれない？」

その突然の提案に、陽平は自分でもよく分からないうちに頷いていた。

一人では、雪の家にいけないからなのだろうか。

それとも、自分に対する言い訳を作りたかったのだろうか。

陽平は悩みながら、未咲を連れて帰ることになった。

「……ねえ、一つ、聞いてもいいかな」

帰り道。いつも雪といるときはよく喋る未咲が、ずっと黙っていた所為で二人の間には重い沈黙が生まれていた。それを、作った張本人が破った。

「……なんだ」

陽平は、横にいる未咲をみた。未咲は、微笑んでいた。

「貴方は、後悔したことあるかな。後悔して、悔やんで、泣いたことはあるかな」

「なにが言いたい」

それが、未咲が聞きたいことではないことが分かっていた陽平は不機嫌に尋ねた。

「良いから、答えて。これは大切なこと」

「……ある、な。試合で負けたときは後悔する」

「それはちょっと違うけど…ま、いいわ」

苦笑した未咲は、冷たい瞳で陽平を見上げていた。

「じゃあ、大切なものが手の中から落ちて言ったことは？例えば……誰かの、命が」

「！」

陽平は目を見開いて未咲をみた。

未咲は、雪の前でみせるけだるげな表情ではなく、冷たい表情をしていた。

淡々と、言葉を続ける。

「言いたいのに、いえなかったことは？言うべき人が、目の前からいなくなったことはあるかしら。冷たくなる手を取ったことは？」

「なにが言いたいんだ！」

ぎっと陽平は未咲を睨んだ。未咲は、淡々と言葉を続ける。

「言いたいことを言えずに、ただ自分の中に閉じ込めることは辛いことよ。伝えたい言葉があるのなら、手遅れになる前に伝えなさい。我慢しても馬鹿を見るだけ」

ずっと、立ち止まった未咲は陽平を見つめた。冷たい、感情の見えない目で。

なにを考えているのか、まったく分からなかった。

出会ったときから、なにを考えているのか分からない奴ではあった。

しかし、いつもとは違う。底知れぬ恐怖が、その中にうごめいているようだった。

「……と、言うわけで、さっさと想いを伝えなよー」

ヘラリ

一瞬で、未咲の冷たい空気が消えた。いつも通り、けだるげな雰囲気をもとう。

しかし、それでも陽平は未咲を見つめ続けた。その瞳の中に、真実がある気がして。

「ほら、ボケっとしてないでさっさと案内してよね」

しかし、もう、そこにはなにもなかった。

陽平は諦めて、雪の家へ急ぐことにした。

「……そう、急いでいかなければならないの。貴方達は――」

ふっと、未咲が呟いた言葉はかぜにのって消えていった。

「未咲、陽平、来てくれたんだ」

いつも通りに微笑む雪に、未咲も笑った。

「雪、早くよくなりなさいよ。あたし雪がいないとなんでも一人でしなくちゃならないじゃないの。面倒なのよね」

「はいはい。陽平も、ごめんね。部活忙しいのに」

困ったように微笑む雪に、陽平は首を横に振って見せた。

「いや、今日はなかった」

なんといえ言いのかわからないといったように視線を揺らす陽平に苦笑しながらも、雪は未咲とのんびりと話しをすることにした。

「あ、あたし帰らないと。じゃね」

しばらくして、急に未咲は立ち上がった。すまなさそうにそう行って、部屋を出て行こうとする。それを、慌てて雪は止めた。

「ちょ、ちょっと待って。私見送りするから」

「いいって。よーへー、雪のことよろしくね」

ニッコリ笑って、そのまま未咲は出て行ってしまった。

後に残された雪は、居心地悪そうにちらちらと陽平を見た。

陽平も困ったように、未咲が出て行ったドアを見つめていた。

「やあ、お邪魔しているよ」

「本当に邪魔だね。一体どうしたんだい」

少女は目の前にいる青年に呆れたような視線を投げかけた。

「いや、もうそろそろ『期限』だからね。一応、君がお仕事をサボらないように見に来たんだよ。まあ、そんなことしなくてもいいとは思うけど、一応、ね」

ニコニコと、青年は右手にはめた指輪をいじりながら告げた。

「いっそのこと、サボろうかとは思っているけどね」

はあ、と溜息をついて、少女は殺風景な部屋にたった一つだけ置いてあるソファの後ろに座り、背もたれによりかかって上を見上げた。正確には、ソファに座る青年を。

「だめだよ。期限は守らないとね」

悲しそうに呟く青年に、少女は苦笑しなからいった。

「分かってる。大丈夫よ、いくらあたしでも仕事はちゃんとするわ」

その仕事が、取り消しにならない限り、ね。

ニッコリと笑う少女に、青年は溜息をついて微笑んだ。

「君ならやりそうで怖いよ。あまり無茶はしないでよね。僕が困るんだから」

「あたしの尻拭いがあんたの仕事でしょ」

にやっと笑う少女に、青年は溜息で答えた。

「はいはい。そうですよ。仕事を無くそうとがんばる貴女様の尻拭いが、僕のお仕事です」

少女は微笑を浮かべたまま、かけていた緑色の眼鏡に手をかけた。

「仕事をするかしないかは、あの子達にかかっているんだけどね」

きっと、分かってないでしょうね。

苦笑しながら、少女はゆっくりと目を閉じた。

——ああ、神とはなんと酷いモノなのでしょう——

——叶うことのない夢を見せ、それが叶わないということも同時に見せつける——

——私達の醜い姿をみて、貴方は笑っているのでしょうか、泣いているのでしょうか——

——ああ、どうか、この世界に救いがあるのだとしたら——

—私に、最後の救いを与えてください—

†††

「……貴方、また職務放棄しましたね？」

「何のこと？あたしは砂時計に従っただけだよ」

くすりと少女は笑い、その笑顔に青年は肩を落とした。

「全く、また上で嫌味を言われました。お前の相方はお優しいなって」

「あははは。あたしは優しいじゃないか」

間違っていないよと、少女は楽しげに笑った。

その笑顔に、青年はふっと笑った。優しく、暖かく。

「そうですね、貴方は優しい人だ。貴方は人に近い。だからこそ、特例で現地係にされたんですから。だからこそ、こんなことが許されているのでしょうかね」

そう言いながら青年は少女の頭を優しくなでる。その母親のように暖かいしぐさに、少女は気持ちよさそうに眼を細めた。

「お疲れさま。よくがんばりましたね」

「うん。でも、本当になんぼったのはあの子達だよ。だからこそ、奇跡は起きた」

少女は、もっていた砂時計を見て笑った。

桃色の砂の半分以上は、上の方に戻っていた。

「これからの人生は、貴方達のものだよ」

少女は、砂時計を見ながら奇跡を起こした友達に囁きかけた。

———了

翌日、雪は学校にこなかった。

「よーへー、雪はまだ体調悪いの？」

「ああ……」

未咲は心ここにあらずといった様子の陽平を怪訝そうに見上げたが、そこに浮かぶ表情をみて苦笑しながら肩をすくめた。

言いたいことを言えず、ただ、どうしたらいいのか分かっていない顔。

知らない土地で迷子になった子供のように、途方にくれた顔が、そこにあった。

「――ねえ陽平。僕の話聞いてくれるかな？」

「未咲？」

陽平は、いつもとは違う表情の未咲をみて、戸惑った。

未咲は悲しげに微笑んで、その話を紡ぎだした。

「私の、私の友達の話。彼女は小さい頃から体が丈夫じゃなくて、いつも寝込んでいたんだ。彼女には幼馴染の少年がいてね、二人とも、いつも一緒だった」

それは、陽平達にも当てはまる話。

「でも、大きくなっていくごとに、二人の間に壁ができていった。ううん、それは壁なんかじゃなくて、すぐに壊れる、壊せるものだったのに、誰も気づかなかった。…・・・気づいたときには、もう遅かった」

未咲はそこで言葉を切り、陽平を見つめた。

陽平は、未咲が何を言おうとしているのか、分かった気がした。

しかし、何も言わなかった。言えなかった。

それは気づかぬよう、懸命に蓋をし、見ない振りをし続けていたものだから。

それに気づいてはいけない。そんなことをしたら、いつもの日常が、毎日が、やってこなくなるから。それだけは、避けたかったから。

「――違う話をしよう」

突然、未咲が話を変えた。

驚いて未咲をみたが、ちょうど逆光になっていて、その表情が見えなかった。

「ある少女がいました。少女は、自分の毎日が変わることを恐れていました。彼女にも幼馴染がいました。そして、彼も毎日が変わることを恐れていました。それでも、彼はその気持ちを言葉にすることを選びました。少女は、怖くなって少年から逃げました」

当然だと、陽平は思った。

毎日が、日常が変わるのが怖くない人間など、いるはずがない。

怖くないと思っている人間は幸せなだけだ。変わる恐怖を知らないだけだ。

少女は逃げたあと、どうしただろう。これは、自分達のことを話しているのだろうか。

考えてみれば、陽平と雪と未咲と一緒にいるようになったのは、高校に入ってからだった。

雪が高校で見つけた友人が、未咲だった。

いつも周りとは違う場所にいるように、自分達を観賞しているような少女だったが、それでも雪の親友だった。それが、うらやましくなかったといえば、嘘になる。

雪の隣は、いつも自分の物だったから。

いつからだろう。そんな簡単なことができなくなったのは。

いつからだろう。雪への、この感情を持つようになったのは。

いつからだろう。自分の感情を、押さえようとし始めたのは。

小さい頃は、自分の気持ちを雪に伝えていた。

雪も、自分の気持ちを笑顔で受け入れていてくれた。

そんな幸せな時間は、時と共に過ぎていった。

もう、戻ってこない、大切な、時間。

誰もが一度は失い、傷ついたであろう、大切な時間。

「それで、彼女はどうしたんだ？二人は、元通りになったのか」

一応、陽平は聞いてみた。

どうせ、二人の関係は壊れてしまったのだろう。

元通りになる方法なんてないのだ。だが、もしあるのなら、教えて欲しい。

そんな陽平の気持ちを見透かすように、未咲はふっと微笑んだ。

「一度失われた物は二度と戻ってこない。形あるものも、ない物も」

やはり。陽平は、そう思い、俯いた。

この感情は、しまっておかなければならない。

今までの関係を、壊してはならないから。

今以上の関係なんて、望めるはずもないから。

「……その代わり、二人は新しい関係を手に入れたんだ。愛する、大切な人の隣に、ずっと、ずっといるという関係。二人は幸せだったみたいだよ？周りが呆れるぐらいに。やっと、ずっと望んでいたものを手にすることができた二人は、今以上の幸せをてに入れた」

優しい声だった。

未咲はいつの間にか、陽平の隣に立っていた。

「貴方は、雪はどうするの。ただ、意味もなく、不確かなものにしがみついておくの？それだっていつか壊れるのに、それでも、前に進む勇気を持たずに、とどまるの？時間は限りある物。とくに、貴方達には、もうあまり残されていない」

「未咲？」

未咲は冷たくも暖かな眼差しで、陽平を見ていた。

陽平も、未咲を見つめ返した。その瞳の中に、答えがある気がした。

そこには答えはなかった。否、答えは、あったのかもしれない。

そこに映っているのは、誰かに答えを求める、今の自分。

そして、その自分は答えを、自分がとるべき方法を、知っていた。

それが怖いと思っていたが、それでも、それをとらなければならないことを、知っていた。

「俺は、俺は、雪が——！」

「やっと、答えを見つけたようだね」

やれやれと、首を振った未咲は、トン、と陽平の肩を押した。

「さ、早くその想いを伝えて上げなさい。手遅れになる前に」

一体、未咲がなにを知り、何を伝えようとしているのかは分からなかった。

それでも陽平は、未咲に強く頷き返すと、踵を返し、雪の家へと向かうことにした。

「その前に」

陽平は、振り返って未咲を見た。

「最初の話、どうなったんだ」

陽平の問いに、未咲は振り返ることなく、軽く返した。

「二人は幸せになったよ。色々あったけどね。ほら、他人のことより自分達のことを気にしなよ。——幸せになるのは、貴方達なのだから」

「.....分かった」

陽平は、今度こそ、振り返らずに走り出した。

もしかすると、あの話は未咲に関するものだったのかもしれないと、陽平はそう思っていた。だからこそ、自分達の背中を押してくれているのではないかと。

「がんばりなさいよ、運命を変えるぐらいには」

未咲の声を背中に受け、陽平は、少しだけ、スピードが上がった気がした。

「——がんばりなさいよ、もう、タイムリミットはすぐそこなのだから」

そっと、持っていた砂時計を見た。

それは、不思議な砂時計だった。

淡い桃色をしたその砂は、今、まさに尽きようとしているようで、なんとか持ちこたえている様でもあった。

それを見て、少女は目を閉じ、きつそうな顔をしながらも、その砂時計を握り締めた。

しばらくして、少女が目を開けると、砂時計の砂は、少しだけ、上に戻っていた。

「.....本当に、あと少ししかないのだから」

少女の眩きは、風と共に空へ消えた。

「ゴホッ、ゴホゴホ」

雪は激しく咳き込んだ。

手をみると、血に濡れている。

自分が死ぬのだと、雪はそう確信した。

「これで……、よかったんだよ」

頬を濡らす水をふき取りながら、雪は儂く微笑んだ。

これで、陽平達に迷惑をかけないと。関係を壊さずに、死ぬことができると。

「これで、よかったんだ」

「本当にそう思ってるの？」

「!？」

誰もいないはずの部屋に、他の人物の声が聞こえた。

驚いてそちらをみると、そこにいたのは未咲だった。

「未咲。どう、して来たの？いつ、入ってきたの？」

物音なんてしなかった。それとも、自分が気づかなかっただけだろうか。

様々なことを考えながら、自分の中を見透かすような未咲の目から視線をそらした。

「……本当に、それでいいの？」

「未咲？」

冷たい、感情の起伏のない声。

恐る恐る未咲をみると、未咲は雪に桃色の砂の砂時計を見せた。

もうすぐ落ちきってしまいそうで、それでも必死に抗っている、その砂。

「貴方はもうすぐ死ぬわ。それでいいの？何も伝えず、その人を突き放したままで」

「何を、言ってるの？」

「彼は決心したよ。貴方はまだ心を決めないの？逃げるつもりなの？」

冷たく突き放すようで、それでいて、暖かく包みこむような、その言葉。

雪は自然と泣いていた。泣きながら、叫んでいた。

「私だって、私だって伝えたい！でも、でもダメなの！私は死ぬんだよ、もうすぐ死んじゃうんだよ！そんな私が彼を縛り付けていいはず、ないよ……！」

それはずっと自分の中に溜めていたはずの言葉。

それを聞いた未咲はやれやれ、と肩をすくめ、雪を抱きしめた。

「未咲？」

「馬鹿よねえ、人間って。そんなに大切なら伝えればいいのに、気づかないのよね」

未咲は雪の頬から涙をそっと指でぬぐってやると、静かな瞳で見つめた。

「あのね、人の思いは、誰かを愛する思いはとても強いものなの。それこそ、死神を遠ざけるぐらいにはね。もちろん、死神だって仕事なんだからもっと強い想いでそれを払いのける。でも僕はそうしたくない。貴方達を助けたいんだ。たとえ、職務違反だとしてもね」

「未咲？何を言ってるの？」

「わからなくていいわ。貴方が理解すべきなのは、自分の気持ち。貴方が彼を愛する気持ちだけだから。もう、本当にさっさと素直になればいいのに」

呆れたような呟きに、雪はぎゅっと唇を噛んだ。

「未咲は、未咲はわかんないよ。私、死ぬんだよ？それなのに、陽平を縛るなんてできない」

「本気でそれがどうしたって感じよね。と言うより、私の話聞いてた？」

「未咲には分かんない！今生きてる人には、これから生きていく人には……！」

雪の叫び声に、未咲は大きめに溜息をつく雪の瞳を見返した。

射抜くような瞳に、雪は後ずさろうとする。しかし、それも拒まれる。

「あのね、確かに私には人間の死の概念なんて興味ない。でも、愛が言葉にしてこそ伝わる物だっただけなのは短くない人生で知ってるんだ。年長者の意見は受け入れなよ。大丈夫、彼はあんたと同じ気持ちなんだから」

「そんなこと無い！それに、それにもしそうだとしても、もう時間は無いの——！」

「……本当に、人間は人の話を聞かないわね」

雪の言葉に、呆れたように未咲は肩をすくめて見せた。

未咲に嫌われたかと思ひ、恐る恐る雪が未咲をみると、未咲は笑っていた。

優しい微笑だった。まるで、困った我が子を見る母親のような優しい微笑。

どうして未咲がそのような顔をするのか、雪には分からなかった。それでも、なぜか心が温かくなるような感じがした。

「気持ちを伝えるのはいいことよ。溜めて、溜め続けて、皆を傷つけるよりも。貴方が自分の想いを認める、それだけで奇跡は起こるのよ？」

「奇跡が……？」

ぼんやりと、雪はその言葉を繰り返した。それだけで、心の中が暖かくなるのを感じた。

「そう、奇跡が起こるの。私はその奇跡を起こせる人間を尊いと思っている」

歌うような、優しく、心に染み渡るその言葉に、雪は泣いていた。

ずっと溜めていたそれが、一気に零れだした。

「——いたい、会いたい、陽平に、会いたい。会って、好きだって、伝えたいよう」

子供のように、幼い子供のように泣きじゃくる雪の背中を、未咲は優しくなでた。

そして、ふと部屋のドアを見て、くすりと微笑む。

「よかったね。奇跡は起きたよ。貴方が信じたから。貴方達が信じたから」

そう言うと、雪の涙をそっと指でぬぐい取り、雪から離れた。

「……雪」

次に聞こえたのは、未咲ではない、低い声。

ずっと傍にいたその声に、ゆっくりと顔を上げた。

そこにいたのはずっと傍にいてくれた、大切な人。

「陽平……」

陽平は雪の傍まで確かな足取りで寄ると、雪の手を握り締めた。

その手を額にあて、絞るような、強い想いのこもった声で、叫ぶように告げた。

「俺は、俺は雪が好きだ。ずっと、ずっと言わないほうがいいって思ってた。だけど、だけど俺は雪が好きなんだ。

もう嘘はつきたくない。俺は、雪がいないとだめなんだ」

その言葉は雪の心を包みこんだ。とても暖かい、その言葉。

「私も、私もなの。私も陽平が好き。大好き。もう死んじゃうかもしれないから言っちゃだめだって思ってた。でも、でもやっぱり好き！忘れたくない。忘れて欲しくないの！」

雪はそう叫ぶと、激しく咳き込んだ。口元を押さえた手が赤い液体で彩られる。

もう、長くはないのだ。だからこそ、入院せずに家にいる。

それでも、それでも奇跡を信じたかった。二人は、相手の目を見て、微笑んだ。

「雪、ずっと傍にいてくれ。一緒に、生きよう」

「私、陽平の傍にいる。ずっと、ずっと一緒に生きようね」

それは無理なことかも知れない。でも、そのときの二人には不可能は無い様に思っていた。

だからこそ、奇跡は起きる。奇跡は、人の信じる心から生まれる。

カチリ

それはある歯車が回転を止めようとした瞬間で

カチリ

それはある歯車が止めようとした回転を再び始めた瞬間だった

愛白花

<http://p.booklog.jp/book/84862>

著者：のと。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanotoruz/profile>

2014.04.17.発行

2014.04.18.ページ数変更

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84862>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84862>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ